（別紙２）

審査結果の要旨

氏名　金　蓮玉

1850 年代後半に 3 年半にわたって長崎で行われたオランダ海軍派遣隊による「海軍伝習」は、日本の近代海軍建設、また西洋からの直接の科学技術導入の起点として注目され、さまざまな研究が積み重ねられて来た。しかし、それゆえに、あたかも当時「長崎海軍伝習所」という看板を掲げて幕府と諸藩の別なく伝習生を教育していたかのような、後年の海軍や学校のありかたを投影した見方がなされがちであった。これに対して本論文は、はじめて本格的に検討された幕府勘定方葦名重次郎の文書をはじめ、関係する史料や研究を幅広く検討し、伝習にまつわる諸主体の意図と、伝習の実情を明らかにする。

第一章では、オランダ側の、日本の依存を深めさせて交易の拡大をもたらそうとする意図と、幕府関係者の「海軍」理解の多様性を示し、伝習が必ずしも洋式の海軍を移植する意図で行われたわけではないことを示す。第二章では長崎に派遣された幕府伝習生の人選と呼び戻しの状況から、伝習生の派遣が彼らを送り出した組織の事情に影響されるところが大きく、特に語学の準備教育機関としての蕃書調所、伝習した技術を伝える場としての講武所・軍艦操練所とは、相互に性格を規定しあっていたことを明らかにする。第三章では、残された時間割を他の史料と照合して詳しく検討することで、身分別の少人数のクラス編成がおこなわれ、学生に合わせて教育内容が変化したことを示す。第四章では、諸藩が幕府から伝習参加の許可を得るのが容易でなかったことを示し、砲術に限り、あるいは幕府派遣者への伝習が一段落すると認められやすくなったと論じる。第五章、第六章では、諸藩の伝習の実態を、幕府「海軍」伝習と重なるものと出島におけるオランダ人からの伝習とに分けて示し、第七章では長崎地役人への伝習と彼らからの「又伝」を取り上げ、後者が諸藩に幅広く技術を伝えてその不満を解消する役割を果たしたと論じる。第八章では幕府伝習生が私的に行った勉強会や伝習への出席を認められなかった随行者の存在を指摘し、長崎では様々な学習機会があり、長崎遊学の経歴自体が個人の評価につながったと論じる。補章では長崎伝習の終結に至る過程を再検討し、横浜開港との関係を指摘する。

以上のように本論文は長崎伝習をめぐる幕府の意図と、「伝習」の実態の多様性を初めて実証的に明らかにした。伝習の全体像に関しては砲術や水夫等の技能伝習の実情や内外の政治情勢とのかかわりの検討などの課題を残すが、本論文は長崎伝習の実施過程を同時代の社会体制と西洋からの技術導入をめぐる動きの中で適切に位置付けた点、またこれにより従来主観的に利用されがちであった長崎伝習、長崎遊学をめぐる断片的な史料を適切に読み解く基準を与えた点で大きな学術的貢献を達成している。以上の理由により、本委員会は当該論文が博士（文学）の学位を与えるにふさわしいものと判断する。